

2. 研究の詳細

プロジェクト名	地域素材を活かした造形教育の研究		
プロジェクト期間	平成27年7月～平成28年3月		
申請代表者 (所属講座等)	阿部 守 (美術教育講座)	共同研究者 (所属講座等)	



2015年11月 インドネシア・バンドンにてレジデンスプログラムに招待され、現地での制作の機会を得た。まさに地域素材を使った制作の実践を行うことができた。バンドンはインドネシア第二の都市である。バンドン工科大学芸術学部をベースキャンプとして活動した。わたしにとって初めてのインドネシア訪問であった。染織が盛んなこの都市は、バチック染めで有名であり、その染織ツールを素材の一部として、墨によるフロッタージュを試みた。手漉きの紙を当て、幾何学模様の素晴らしい形態が写しとれた。このバティックの型を作る工程も興味深く銅版と銅線を巧みに銀ろう付けし、金属工芸としても見ごたえがあった。さらにローカルマーケットに赴き、作品素材となるべきものを

探して歩いた。食糧・日用雑貨・工具類・衣料品など、カオスのようなマーケットはまさに素材調達には打ってつけの場所である。インドネシア、マレーシア、フィリピン、ヨルダン、日本から作家たちが集い、相互理解と助け合いの精神で創作活動するプロジェクトである。紙・机・布・板・木の棒・鉄線が、わたしの素材である。日頃の鉄でのそれではなく、全てをニュートラルにして頭を空にして、子供のように素材と接することが重要なことである。

授業時数が減少した小・中学校の図画工作と美術科における課題は、如何に今日的なテーマを子どもたちに理解させる題材を効率良く授業に活かさず、且つ、造形教育の基礎的学力を身に付けさせることができるかにあると言える。伝統的且つ基礎的な造形能力を培うことは基より、ここ20年やっと定着してきた「造形あそび」を効果的な教材とすることが急がれる。定着したとは言え、大半の現場教員がその実践に戸惑いを感じている。本プロジェクトでは、未だその基本理念が確立されていない「造形あそび」の理論的な裏付けとその教材開発を行うことで、本来この題材の持つ歴史的な意義とこれからの学校教育を主体とする造形教育の可能性を視野に入れた教材開発について研究する。小学校学習指導要領では、「材料を基に造形遊びをする活動として、身近な自然物や人工の材料の形や色などを基に思い付いてつくること。」更に上学年では、「場所を活かした造形遊びの指導」が記されている。本研究では地域素材としての造形活動を考察した。

自然や風土を題材とする制作活動では、コンテキストと身体との間に関係性を与える「場所と時間」に対し、素材を選定し、さらに幾層にもわたる要素を構造化することと捉える。この一連の制作プロセスを研究し、分析することは、造形あそびの理論構築に繋がるものである。生活環境をテーマとした題材では、地形、植生、水の流れ、土壌などの要素を五感を通じて場の〈テクスチャー〉等に表現として繋げる。感性を働かせ、創作と結びつけることが、造形あそびの真骨頂であり、図画工作・美術科を巡る造形教育の今後を支える方向性であると考えられる。

このように素材の特質を制作者として主観と客観を交えて、試行錯誤しながら作品や製品に辿り着ける方法は、かつてのドイツ・バウハウスの予備課程で実践された、イッテンを主体とした教授陣たちの実践に近い方法論ないし実践論、さらに造形思考に近いものと捉えることができる。バウハウスでは、入学後の6か月間を学生全員が木材、金属、ガラス、染織などの工房でモノづくりの基礎的トレーニングを受けた。この戦後美術教育の一原点ともいえるであろう美術デザイン学校バウハウスの教育哲学を今日の造形教育に照らして現状を照射する取り組みを行うことに至った。 科研分担者として本年から3年間にわたり、神戸大学 鈴木幹雄教授を代表者として2名で、文献調査とインタビューを主体に理論化に努めることにした。研究テーマは「シュトゥットガルト・アカデミーの改革的伝統とバウハウスにおける発想法教育学の成立」として実践的研究を交えながら追究することとする。